[FRONT LINE]

# 工藤和美

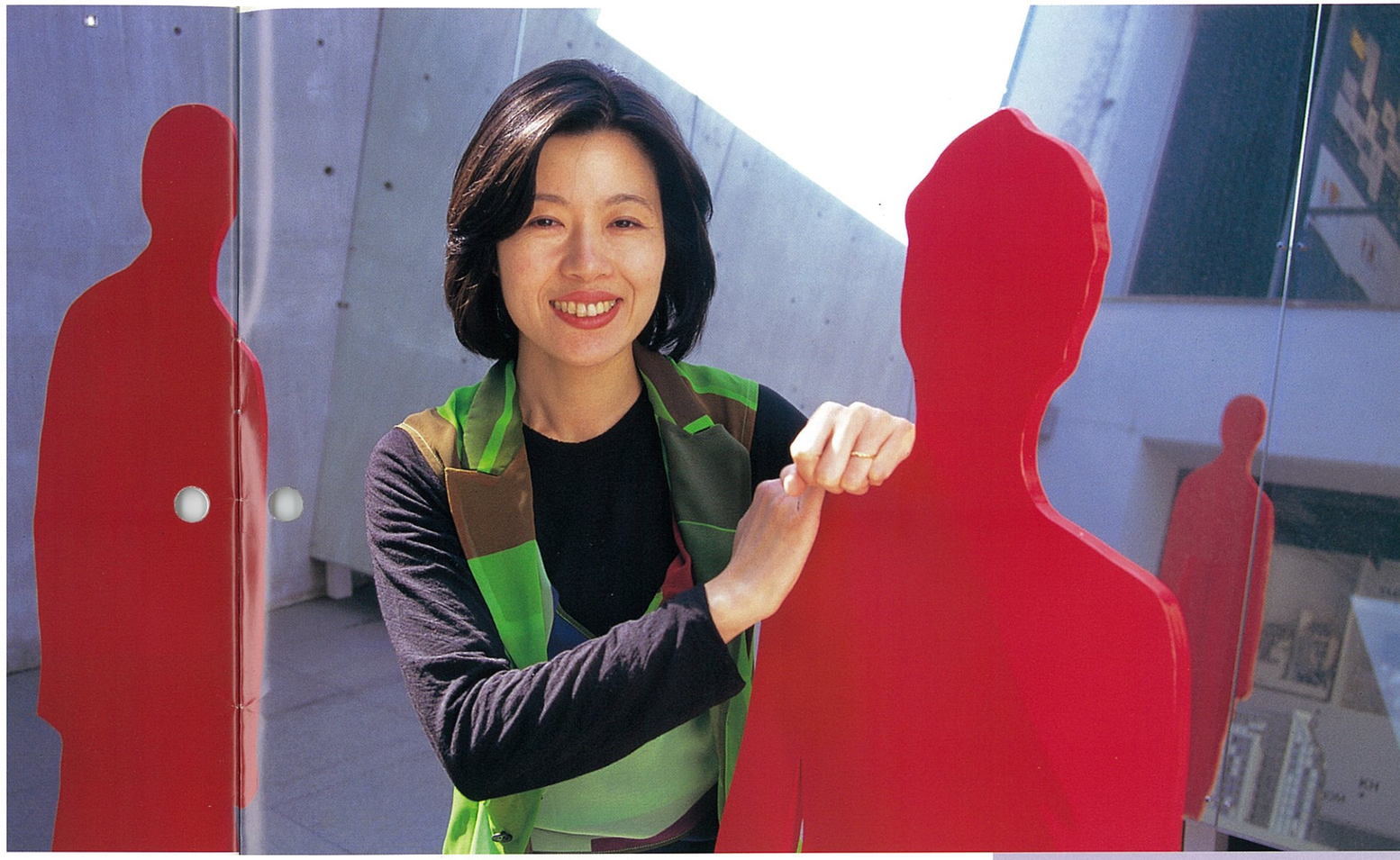
*Kudo H. Kazumi*

建築家
シーラカンス代表取締役

## わかりたくなる建築

インタビュー／人・車・都市、そして文化

建築の若き精鋭集団「シーラカンス」
そのひとり、代表パートナーを務めるのが建築家・工藤和美である。
遡ること10年余、東大大学院で出逢った才ある同志が結集し、シーラカンス設立。
以来、ユニークかつ自在なチーム編成で建築界につねに新風を吹き起こしてきた。
シーラカンスという、複数の主体の遠心力が生みだす建築とは、
都市のダイナミズムとは何か。



先頃、工藤和美は「日本建築学会賞」を受賞した。
受賞作は、幕張ニュータウンに1995年に誕生した『千葉市立打瀬（うたせ）小学校』。

### 都市計画と建築家の連動がなかったら、打瀬小学校のコンセプトは、実現できなかった。

実はこの地域とのかかわりは、この校舎建設計画の起こるずっと前、都市計画の頃からなんです。「幕張新都心住宅地区基本計画策定」のワーキングチームの1人として、1987年から、このあたりの街づくりを千葉県企業庁のもとでやってきました。ですから、道がどの方向に走っていて、道路幅は何メートルで、何メートルピッチでブロックがあり、公園はどこで、学校はどこ……と、街全体の骨格からその意味まで何もかも知っていて、それで実現したのが「打瀬小学校」というわけです。

そうした背景があったからこそ、このオープンなコンセプトを、どうしても成立させたかった。どういうことかというと、学校から門や塀をなくすのはそう簡単なことではないんです。たとえば、グラウンドでボール投げをしていたらボールが道に転げていった、という心配も出てきます。でも、幸いこれまでの学校のイメージを打ち破る、すぐれたコンセプトと見事なデザインの調和ともいうべき、シーラカンスの工藤和美ならではの建築作品である。

つまり、都市計画の方がいくら「いい街づくりを」と頑張ってくださっても、最後にどんな建築が建つかというイメージまでもつには、やはり限界がある。一方、建築家は敷地を読む。それが都市計画のプランであっても、「ここにはどんな建築が建てられるだろうか」と、少なくとも頭の中ではつねに具体的な建築のイメージを想い描く。ですから、法規などの基準だけでなく「この道をもう少しこうすれば歩く人も楽しめるじゃないか、建物もこうできるじゃないか」と、都市計画とはまた少し違った視点から、道幅や街区の大きさなどを考えていくわけです。

私は大学院のときに、交換留学生的な扱いでオランダの役所のニュータウン課で数か月ほど働く機会を得たのですが、そこではニュータウン計画の段階ですでに建築コンペを行い、建物の配棟計画まで同時に進めていました。つまり建築と都市計画を一体化させて、街づくり全体のプランを練る。ところが、日本は残念ながら、いまだ分野を完全にわけたままですからね。本来はリンクしてやるべきものだと思うんですが……。

いい都市計画の段階から深くかかわっていましたから、その時点ですでに、グラウンドの向こうがすぐに道路とならないよう公園や緑地をはさむことができました。また、幕張ベイタウンの学校用地にはすべてそういう仕掛けがしてあります。

そして今回は、その仕事が完全に手を離れたのちにプロポーザルコンペに呼ばれ、結果として私の案が通り、設計者としても選ばれた。ですから、都市計画のときには、まさか自分たちが最後の設計まですることになろうとは予想もしていなかった。ただ、学校用地を考えるのですから、日本全国のいろんなすぐれた学校を学び、「こういう学校ができて欲しいな」というイメージだけは鮮明に描き、その時点で私たちにでき得る最大限のことを都市計画の土地利用の中に落とし込んでいった。


CONTENTS

P1 FRONT LINE
●［インタビュー］人・車・都市、そして文化●
工藤和美（シーラカンス）
わかりたくなる建築

P7 NEW LINEUP
●立体駐車設備●
ＥＬパーキング・ミックス型

P9 VISION
パーク＆ライドシステムと駐車場整備

P11 ARRANGEMENT
●立体駐車設備／導入事例●
ナティ沼津
いなりやビル

P13 TREND
Windows時代のＣＡＤ利用
ローコストにネットワークを活用して
手軽にデータ共有・共同作業を

P14 ANOTHER PROJECT
●展示造形本部●
Ｋ－ＭＵＳＥＵＭ
東京臨海副都心共同溝展示館

## 当たり前のことがどうして、当たり前にできないのだろうか？シーラカンスの追求は、いつもそこから始まる。

たとえば、「学校の設計は難しい」と言われてきたのは、それは管理する側の論理だったと思うのです。建築の在り方にしても、「いったん学校に来たら子供は先生の管理下に入るから、親や外からの口出しは一切ならない」とでもいうような、そういう空気を、学校という建物自体が醸し出してきた。もちろん、今はそういう時代ではないわけですが、形だけは妙にそれが残ったままできた。

打瀬小学校の設計をするにあたって、私は、管理する学校の側ではなく、むしろ子供たちの側に立って学校をつくろうと、まずそこからスタートしました。先生にとっては管理上、使い勝手が少々悪かろうが、子供たちが楽しく過ごせて、毎日行きたくなるような学校ならば、それが一番だろうと。また、そのためには、今までのように外から何も見えない囲われた建築ではなく、逆に必要なのは、中の様子が伺えるオープンな空間だと思った。

そのほうが学校のコンセプトとしては当たり前、子供にとって心地よい空間であるはずと、私はそう思った。ですから、単位が8メートル角のクラスルームであっても外部との接点をもたせるなど、できるだけオープンな設計を進めた。だって、トップライトひとつで外の雰囲気を味わうことができるのですから。

でも、そうは考えない方も多いです。たとえば「オープンにしすぎると鍵を閉めるのが大変だ」とおっしゃる方もいました。確かに、それはそのとおり。オープンであればあるほど窓や扉の数は多くなる、鍵の数も多くなるから管理は大変になる——それは、当たり前のことです。でも、それを大変と考えるか、それよりも心地よさのほうを優先するか、そこの違いだと思うんですね。

実際、打瀬小学校の先生たちからは、そうしたクレームはまったく出ていません。管理を担当する用務の方も、「ここは鍵を全部閉めてチェックするのに1時間もかかっちゃうからね」とニコニコしながらおっしゃいます（笑）。もちろん、皆さんの努力あってのことと感謝しています。

街づくりにおいても、意味のある小学校だと思っています。特にニュータウンの場合は、街としてはやはり特殊な部類に入ります。人口構成が似たような世代に集中

**マインズ北堀江**
ビルが密集する大都会で、敷地は間口7メートル、奥行き30メートルのウナギの寝床。通常であれば、暗くて細長いビルしか建たないはずが、それらの難題をすべてクリア。逆に生命の息吹さえ感じさせる、心地よいオフィスビルが完成した。エレベーターは2棟にわかれた建物のほぼ中央部分に設けられ、その扉が開くと……パッと光溢れる空間が現れる。

## 立ちはだかる建築ではなく、なにか建ったときに、消えてくれるような建築……。そんな人の動きや、空間に溶け込むような建築に、私たちは今、非常に興味を覚える。

シーラカンスとしての活動は今年でちょうど10年なんですけれど、仕事のやり方は時代ごとで少しづつ変化しています。当初は、すべての建物を全員のパートナーがデザインするということをやっていたのですが、最近は徐々にそのスタイルが変わりつつある。たとえば住宅など小規模なもの、あるいはクライアントが固有ではっきりしている場合には、窓口を1人決めて、その人がすべて引っ張っていく。一方、ある程度の規模をもつ建築の場合はメインの他に複数のパートナーが担当となり、さらに、そこに全員参加の技術上、をしておいた。街の人が通り抜けできるパスをつくったり、フェンスも門もすべて取り払って、みんなが行き来できるオープンな学校づくりを目指した。

完成してからの反響は、当初の予想を超えていました。校長先生が熱心な方でアンケートなどもよく実施されるようなんですが、相当数のパーセンテージが「この学校に子供を入れたくて移って来た」という人たちで占められていたそうです。特に賃貸の方には、それが顕著なようです。

だから、街づくりをする上で、学校のような公的施設をきちんとある程度いいものを建てることは決して無駄ではない。それは行政としての姿勢をよい意味で示すことであり、住民の期待に応えることであると、私は思います。



デザイン上の検討をするデザインミーティング（DM）が定期的に加わり、デザインをブラッシュアップさせていく。

でも、どんな場合でもデザインは、つねに全員にオープン。皆が勝手に寄ってきて「あ、ここが面白い」とか「もっとこうしたら」というような形で、どんどん参加していく。また担当者もそうしたアイディアをどんどん取り入れ、自分のものにしていく。要は、どのプロジェクトにも「パートナー全員が意見を出せる場がある」というのが、私たちシーラカンスの仕事の最大の特色だと思います。

テーマに関していえば今は、打瀬小学校もそうですけれど、人の動きとか、空間をどう使うかということに皆の関心が集まっています。つまり、人に心地よく使われる建築で、その様子がそれとなく外に滲み出すような建築。大きな壁がありますとか、丸い何かがありますというように建物の構造そのものに目がいく建築ではなく、それよりは動きへ目が向く、楽しい空気のほうへ視線が流れるような建築。で、中の様子が滲み出すということは建築の存在自体は隠れる、消えるわけです。

もちろん、外観は建築家にとって非常に重要な要素なんですけど、といって私たちの目的は、オブジェをつくることではない。むしろ建築によって新たな人の動きが創出され、それで人が活きるような建築、住む人が喜ぶ建築、それを、私たちシーラカンスはつくっていきたいのです。

## パーキング自体は、そこは実に有効なコミュニケーションの場になる可能性をもっている。

ただ日本では、先程の学校の鍵の話とも絡むんですけど、どうしても「管理」という問題が何にでもついてまわりますね。たとえばパーキングを考える場合でも、実は、幕張地区でも以前「住居用の駐車場が足りないから、公園の下にでも公共の住民優先のパーキングをつくろうか」という案が何度も出たんです。だけど、やはり管理の問題とぶつかってしまう。また幕張に限らず、いろいろな現場で打ち合わせをしていると、どこでも、このセキュリティの問題が出てきます。

特に、オーナーはそこを深刻に捉えてしまうようです。で、その結果、駐車場は夜9時に閉めてしまうところが多くなる。その時間を過ぎると、車の出し入れさえできなくなる。

たぶん、日本は「人を信じない国」なのだと思います。小学校の管理の問題もそうでしたが「人が自由に行き来できることは危険である」、「塀をなくすと誰か悪い人が入ってくる」と、だから何でもかんでも「閉じてしまおう」という方向になる。「安全」という名の下、逆にそのためならば、他のいいもの、必要なものまですべて葬ってしまってもいいという。

でも、そうではないと思うんですよ。たとえば、パーキングに対して人があまりいい印象をもたないのは、そこが密閉された、しかもあまり明るくない、その空間がもつイメージのせいではないかと。一方、パーキング自体は、私からみれば、そこは非常に有効なコミュニケーションの場になる可能性をもっている。だって皆さん、休日にはよく洗車なさいますよね。すると住宅街などでは、車を洗っていると「こんにちは」とか声をかけ合い、結構それがきっかけになって井戸端会議みたいに発展することがあります。ですから、集合住宅などでは特に、駐車場はコミュニケーションの場としてもメリットがある。

でも、従来の地下駐車場のスタイルではちょっとイメージ的にも辛いので（笑）、ある計画で私たちは、地盤に大きな穴をあけ、自然環境を取り込みつつ、実際には駐車場であり、洗車場にもなっているという「パーク（公園）パーキング」というのを考えたことがあります。あいた穴には木を植えるなどして、そうすれば光も入り、安全な雰囲気もすごく出せるんじゃないかと。

それに高密度に入れなければならないときは、日本ではやはり機械式駐車に頼らざるを得ないわけです。たとえば、幕張ベイタウンのマスタープランをやったときも実は当初の予定では、全部が地下駐車場のはずでした。ところが、バブル期ということもあって予算的に難しくなってきて、結局は第1期のマンション6棟の内、5棟は地上面に機械式の立体駐車となり、残りの1棟、1社だけが頑張って地下駐車場を入れた。でも、圧倒的に売れたのは地下式にした

**大阪ガス未来型実験集合住宅**
**NEXT 21 ／自立家族の家**
家族の中の個人をテーマに「自室からダイレクトに外へ出入りする」という大胆な発想でつくられた実験住宅のひとつ。リビングなどの家族共有スペースはその先にあり、上下に開閉する特殊なパーテーションで仕切られている。それをすべてオープンにする、あるいはリビングと自室のみをつなぎ他を遮断するなど、空間づくりも用途に応じて自由自在。

マンションのほうでした。それで2期目からは、ほとんどが地下タイプに定着したようです。完全な地下立駐ではなかったようですが、でもやはり地上よりは、地下のほうがニーズ的に高いという結果が如実に現れていましたね。「地上面はもっと別の空間に利用したい」という意識がたぶん皆さんおありなのでしょう。

ただ、いずれにしても、問題はさっきの「安全をどう考えるか」です。私たちが考えた公園パーキングが実現できなかったのも、やはりそこがネックでした。要は、発想の転換だと思うのですが、残念ながら、「人を入れることでセキュリティを保つ」というほうへは発想を向けてくれない。「人が見ているから悪いことができない」というほうが、むしろ私は抑止力をもつと考えるのですが……。

## 老人と赤ちゃんの感性はまったく同じだと思う。だから、人間性をちゃんと考えた老人施設を自分の手でつくりたい……。

個人として今、一番やってみたいと思っているテーマは老人施設です。それは私が建築家である一方、子育てをしている母であり、そしてもっと個人的なことを言えば、私たち夫婦だけでみても実際、いずれは4人の老人を看なければいけないという状況が予想されるからです。また、これはわが家の問題というより、すでに超高齢化社会に突入した日本にとっては、今後ほとんどの家庭で起きてくる深刻な問題だと捉えています。

子育てを通じて気づいたことですが、老人と赤ちゃんってとてもよく似ているんですね。ところが残念ながら、皆さん赤ちゃんには愛情をたくさん傾けてくれるのですが、老人には決してそうともいえない。もちろん、実際に介護にあたってくださっている方々は、深い愛情をもって一生懸命やってくれています。だから、それを批判したいのではない。要は、私の仕事で言うところのプランニング、施設の建築がおそまつだと思うのです。

私は、たまたま老人施設などの建築を対象とした賞の審査員もやっている関係で、このところずっとそうした施設を年間十何カ所も見て回っているのですが……、実態を知ってしまうと、非常に哀しいものがあります。

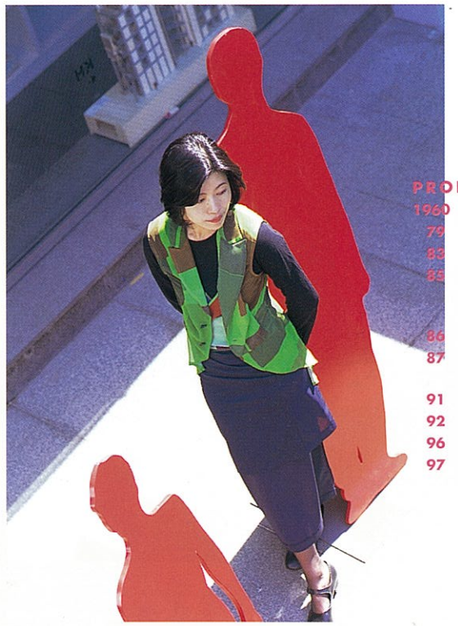
その審査で、比較的よい設計をなさっている園を訪ねたとき、その園長さんがこんなことを言っていました。もう何もわからなくなっちゃった痴呆のおばあさんなんですが、施設の側にある小さな滝の水の音や小鳥のさえずりには、ものすごく反応すると言うんです。ほとんど動くこともできないような人が、それを感じたくて、這いつくばって外に出ようとする。つまり、赤ちゃんと同じく、自然の音や光などには非常に敏感なんです。ところが、そうした感性にかかわる部分については建築も、設備も、ソフトも、まったくおそまつというのが日本の実情。以前長く暮らしたヨーロッパのほうでは、「自分でも入りたい」と思うような施設にずいぶん出会えたんですけどね。皆さん、まるで普通の家で暮らすような感覚で生活しておられて、少なくとも、日本のような「施設」というイメージではまったくつくられていませんでしたね。

最近、日本では『ハートビル法』という法律ができて、それによってさまざまな安全に関する基準が新たに設けられたわけですが、実は、私はそれに対してとても警戒しています。この国でいう基準とは、つまりは最低限の条件のことだからです。ゆえにその施行によって、条件だけは満たした最低の建物が今後ますます増える可能性がある。

だから、その意味では行政が基準を定めるのではなく、また、これは私たち建築家の責任でもあるのですが、建築家が少しでもいい建築をつくり、それを見た人が「あれはいいね」と。その判断がひとつの基準材料となって、結果的にすぐれた建築が増えていくことが望ましいと思っています。でも、これは建築家の意志だけではどうにもならない。行政も個人も含めた、クライアント自身がそれを判断するだけの目をもってくれないと……。

「あの学校はいいね、今度の計画もああいうふうにしたいね」というように、実際に見た方がそう思い、それが次の学校づくりに反映されるという形でいくしかない。

同じく老人のための施設も、ひとつでも「これはいいね」と思うようなものができて、そこではじめて、自分でも入りたくなるようなすぐれた施設が次々に生まれていくのだと思う。



Kudo K. Kazumi

PROFILE

1960 鹿児島市生まれ（福岡市出身）
79 福岡県立修猷館高等学校卒業
83 I.A.E.S.T.E.派遣生：スイス航空建築部にてターミナル計画を研修
85 横浜国立大学工学部建築学科卒業
東京大学大学院修士課程進学
I.A.E.S.T.E.派遣生：アイセル湖干拓地開発局（オランダ）にて研修
86 株式会社シーラカンスを共同で創設（代表パートナー）
87 東京大学大学院修士課程修了（工学修士）
メディアパークケルン設計競技1席入賞（原研究室にて）
91 東京大学大学院博士課程単位取得
92 昭和女子大学非常勤講師
96 杉野女子短期大学非常勤講師
97 横浜国立大学非常勤講師



## 日本は今、さまざまな面で、急速に変わらなければいけない時代になっている。ところが、日本人はそれをもう仕方ないとあきらめている。

改善の余地はまだまだある。都市計画や建築だけでみても、子供も老人も、そもそも人間自体が暮らしやすい街づくり、生活づくりは可能だと思います。でも、一方で私は、建築家をやっていて時々不思議に思うのです。たとえば、皆さんが家を買うときというのは、どうしてああも簡単に決めてしまえるのだろうかと。つまり、なぜすぐに妥協しちゃうのかと。まるでデパートで吊るしの背広でも買うような感覚で、建売りの家などをポンと買ってしまうじゃないですか。でも、それは10万円の背広ではなく、何千万円もする家なんですから、もう少しポリシーをもって、「自分の住環境をつくろう」という意識があってもいいだろうと率直に思います。

たとえば、私たち建築家に相談してくれてもいい。シーラカンスの場合でいえば、仕事の規模や内容はまちまちです。だから建築費も、1千5～6百万のものもあれば、40～50億の規模に及ぶものまでいろいろです。決して、金額や規模の大きさだけで仕事を選ぶわけではない。だけど、住む人のポリシーは欲しい。文章を書く人が文字で自己表現するように、建築家は、建築を通じて自分たちの何かをそこに表現しようとする。クライアントとの共同作業で住む人が喜ぶ建物ができ、建築的にも手応えのある仕事に出会えたら、それが建築家としては最高ですね。ですよ。

その意味では、日本人は住宅に関してあまりこだわりのない、金銭感覚も欧米人に比べて比較的アンバランスな国民性をもっている、と言えるかもしれませんね。欧米の人だったら、そんなに高い買い物をするときには簡単に妥協などしない。少しでも自分たちの暮らしに合うように、細かくさまざまな注文をつける。でも、日本人は、住宅メーカーの展示場などに行って「大体こういう感じ」と決めたら、あとは「坪いくらだろう」ぐらいしか興味がない。大金を投入してつくる大事な自分の家

**那須の別荘**
たとえば都会の中にあっても、ぜひ住みたくなるスマートな別荘。しかも建築コストは驚きの1千万円台。「有名建築家のつくる建築＝高い」と思いがちな一般人の常識を根底から覆すような作品でもある。「規模や金額というよりはテーマ、住む人のこだわり。そして、その結果、いいものがひとつでも多くできてほしい」というシーラカンスの姿勢は、こうしたところにも伺える。

**［主な作品］**

1990 桜台アパートメント
91 大阪国際平和センター
91 マインズ北堀江
91 SELFISH恵比寿
93 AIS大宮ビル
93 大阪ガス未来型実験集合住宅 NEXT 21（#303）
95 千葉市立打瀬小学校
95 出雲市地域交流センター
96 那須の別荘
96 大阪市水上消防署
97 鳥取砂丘博物館

**［主な受賞］**

1987 GIMICK／SD賞
90 桜台アパートメント／東京建築士会住宅特別賞
93 大阪国際平和センター／BCS賞等
96 千葉市立打瀬小学校／千葉県建築文化賞、日本生活文化賞
97 千葉市立打瀬小学校／日本建築学会賞
97 鳥取砂丘博物館／公開コンペ1等

●COELACANTH［工藤和美］
TEL.03－5724－6606

PHOTO / T.SHIMOMURA,COELACANTH, PPS(表紙)

CADによる
建築図面の描き方
DRA-CAD for Windows 版

TREND（P13）でご紹介した「Windows時代のCAD利用」。そのDRA－CADfor Windowsの操作方法が実際に学べるという、待望の本が刊行されました。体験版CD－ROM付
●ミニワールド刊
定価3800円＋税

5名様

ギャラリー・間 叢書06
シーラカンス JAM

建築の若き精鋭「シーラカンス」を知るための一冊。複数の主体の遠心力が生み出す建築と都市のダイナミズムが、美しい建築写真集の中で語られています。
●TOTO出版刊
定価1456円＋税

5名様

Presents
同封の「アンケートはがき」に必要事項をご記入の上、ふるってご応募ください。
※封筒のラベルに印字されているお客様番号を忘れずにご記入ください。